

あつたと思つた。いつ私たちの番が来るかと毎日が非常に長く、元氣をつけ励まし合いながら頑張つた。

二十三年九月に「ヤボンスキー、東京ダモイ」と軍部より使者があり、喜びで胸一杯になつた。ウオロシロフ駅より貨車に乗り、二日たつてナホトカ港に着いた。数日して汽船が入港、乗り込み、懐かしい日本の国に七年ぶり、祖国の土を踏んだのである。

日本の美しい自然の光景は何とも言えず、涙でいっぱいであつた。いろいろな検査と手続を済ませ、すべて懐かしい復員列車で故郷へ走つた。途中、婦人会の接待を受け、そのありがたさが心に残つている。

二十三年十月三日、親戚の人に迎えられ生まれ故郷に到着したが、一生忘れられない思い出である。自分の辛苦を超越して励ましてくれた戦友に深く感謝し、終生変わらぬ親交を願つているものである。

戦後五十年を経た今日、どん底から立ち上がった日本国の姿は、先輩が辛い苦しい環境にもめげず生き抜いた努力が、今日の日本文化や経済を成長させた原動力となつたと思つている。

数十万の友よ、安らかに眠りたまえ。戦争のない平和な世界であることを祈つてやまないものである。

在ソ期間三年。

強制抑留の思い出

神奈川県 相原 貞雄

大正十年四月二十日、下曾我村曾我原で生まれる（以下いずれも小田原市）。その後、国府津町に転居、大震災で高田別堀に移る。昭和四年、千代尋常高等小学校に入学。昭和六年六月、下府中村鴨宮、現住地に新築転居。したがって下府中小学校に転校。昭和十一年、下府中小学校高等科卒業。

昭和十一年五月、久野（小田原市）日加KKで働く。布地にコットン粉ゴムなどを塗り加工し、人工革製品、ゴム加工布で雨がっぱの製造をする工場であつた。當時は主として海軍、国鉄（現JR）の雨がっぱを加工仕上げし、納品していた。織機もあり、糸から布地の

生産をしていた。

昭和十二年九月、国府津郵便局外勤から内勤、そのうちに小田原局に転勤。昭和十六年徴兵検査甲種となり、昭和十七年九月、横須賀武山第二海兵団に入団するも、内部身体検査で既応症のため即日帰郷となり再検査待ち。昭和十七年十月、当時疎開と増産応需のため新設中の印刷局酒匂工場に入局。印刷局在籍のまま、昭和十八年、徴兵再検査で既応症消失で再兵役に服すこととなる。

昭和十九年三月、東部六部隊（歩一）に入営する。昭和十九年四月品川発、駐屯地満州国孫呉に向かう。昭和二十年四月上等兵に進級。昭和二十年七月初ろ、幹部養成集合教育のため（切り込み隊要員）山春府に行き訓練中アメーバ赤痢となり山春府病院に入院。入院中の八月九日早朝、病院前草原よりソ連の飛行機が飛び立ったと知らせあり。間もなく、ソ連が宣戦布告したので駅まで行き、着いた列車に乗り南下せよとの病院側の指示あり。単独行で駅に急ぎ、到着の列車に乗り込んで南下中、ソ連機にねらわれたのでSは全

速で疾走。二、三席前の人のがのどに弾が当たり、その後どうなったか。車窓外を見れば、砲車の南下などを見たわらに見、北安駅に着きひとまず北安病院に収容される。

八月十五日、収容者全員集合所に集まるようにとの指示。正午、例の玉音放送あり。終わって上級者より、日本は今放送のようにポツダム宣言を受諾して戦争終結の道を選択した、別令あるまで各自待機の状態であるようにと。そのうち二十日ごろ武装解除となる。武器とおぼしき物は全部出すようにと。その後病院は閉鎖、北安飛行場の格納庫で約一カ月間くらい起居。食べ物も現物支給で、空きカンでたき火をし自炊。

九月二十日ごろ、梯団（千人単位）を組み、東京ダモイのため行軍開始。その間、食べ物も現物支給で、粟が多くなる。たき火をし、その外側の火の当たるところで空きカンに粟を入れ、煮て食べる。

行軍中、満服を着た日本人の死体多数に行き会う。点々と死骸となって、川の中で馬に乗ったまま一緒に死んでいる人もいた。単独行で行き倒れか、現地人の

襲撃に遭ったのか、満州馬の死骸もたくさんあった。ソ連兵は歩くのがきつくなると現地馬を徴発し、餌も与えず、動かなくなると乗り捨てて、馬の行き倒れである。

十日くらいして国境の町、黒河に着く。黒龍江を渡る船待ちの後、対岸ブラゴエシチェンスクに入ソ。そして貨車で十月二日ごろハバロフスク着。野宿の食事は同じようであるが、今度は満州の山野行軍と違い燃料が乏しく、雪に見舞われた。

ハバロフスクからシベリア鉄道の支線に点在する収容所の補修作業。主として周囲にあるシベリア松（赤松）を五十センチくらいに切り、それを割りさく作業。もちろん屋根板用、壁の下地用もある。床板の補修。ウルガル、ヤクディニヤ、テルマと移動して行った。その移動が、昼飯前とか夕方である。飯は着いた先にあると言い、着いた所では用意してないと言う。移動の度ごとに、普段でも空腹のところへ一食抜きには本当にまいり、こたえました。

夏は線路の枕木交換、運搬、下ろしてある土砂をな

らす路盤整地など、余りノルマは上がらない。テルマ収容所に移り、ある日食糧受領使役に出かけ、馬車で駅まで運ぶのであるが、御者がいないというので買って出た。積んだ荷物に腰掛けて御していたのだが、下り坂に来たとき馬が惰性で走り出し、そういうときは手綱を締めるものだが、体力不足なので締め不足。速度が出て荷物から滑り落ち、車の下に潜る格好。瞬間とつさに縦長となったからよいが、横倒しになって頭をひかれればいちころ、足なら切断。運よく左横前部を土面にこする格好、毛皮状にむしられておらさがり病院に収容。医師が化膿を心配し剥がれたところを切り落としたので、ハゲとなって今でもそのままである。そして病院（テルマ）より東京ダモイとなる。

昭和二十二年十一月半ば帰国。その当時は回顧するに、玉音放送の届かなかったところ、届いても上官が信ぜず、ソ連と対戦し、戦死、戦傷の人、「平和の礎」によると相当の差異がある。私は遠方、奥地にも行かず管内の軽作業が多かった。また、市街地に近いくたので衛生も厳しく、入浴も時たま強制的に実施され、

被服も熱乾でシラミの消毒済みの物を着ていたなど、運がよかつたなあと思います。

しかし、希望のない極限の生活を強いられたので、帰国して、いかなる困難も苦にならない、しないとえ苦しくとも當時を思い起こせば、腹が減れば食べれば腹を満たし、夜は昼、ふとんの上で安眠でき、努力すれば報われる。これにまさる幸せなしの気持ちを持ち続け、それが今でも生活の信条、気持ちの励まします。

思い出のその時代

新潟県 三田 敏 男

大正十三年十月十五日、現在の新潟県岩船郡荒川町長政、農業、主として稲作農家の次男として生まれ、両親と兄弟七人。兄はソ連タイセツト病院で昭和二十二年二月三日死亡。

私たちの子供時代は、義務教育六カ年。幸い私は高

小卒。

時は日支事変中にて軍国化時代、当然青年学校にて軍人教育を受ける。特に日米開戦以来、男子は次々に召集令状にて出征する。私も当然、現役兵証書を受け、入営を命ぜられる。入営部隊、満州第二二九部隊楓隊、日時、昭和二十年二月十日午前十時、大阪府津村別院集合。

二月十四日博多港出港、釜山上陸。目指すは東滿綏省綏陽県綏芬河。兵科は砲兵、三八式十五センチ榴弾砲、一個中隊四門、初年兵は四十五名。その教育中五月、作戰命令を受け第一二四師団砲兵連隊に。さらに六月野砲兵第一一六連隊に改編となり、綏西の兵舎に若干の馬と馬の手入れに当たる十名くらいが残留、本隊は穆稜に陣地構築中、八月九日早朝より敵機来襲。日増しに激しい攻撃、特に敵戦闘機の機銃掃射。中隊長榑田少尉、交戦状態に入る命令。

いよいよ決戦、即戦闘態勢。中隊は十五センチ榴弾砲三門をほぼ三角形に砲列布置し、私は第二小隊第三分隊、小隊長小松見習士官、分隊長松村伍長。もはや